

は能率が上がらない。地元浜松の召集者は家に帰って、シャベルや、つるはしを持ってくる。靴もない、地下足袋も不足しているので草鞋・草履を作って履かせる。葉がなければカマスをほぐして作るという状態だった。見えない敵、反撃することもできない敵から、攻撃されるだけ、切歯扼腕どうにも仕方のない立場の本土決戦用の内地部隊も、大変だったことも知ってもらいたい。

長沙・湘桂作戦

熊本県 高木義輝

私は昭和十七年十二月、現役兵として熊本十三連隊に入隊しました。もともと現役召集から中支派遣軍の要員を覚悟して熊本に入隊したのであります。

要員地には戦地上番ということで引率の将校たちがきて、熊本を二十三日に出発しました。勿論船舶輸送で釜山に上陸し、朝鮮鉄道を北上し満州經由、奉天回りで、山海関を通過し南京の向いの浦口へ着きました。そこで

下車し船に乗り南京市内の兵站宿舎に着きまして、次の連絡を待ちながら正月を迎えました。そのうち、船で漢口まで溯ることになりました。

もともと本隊の広部隊というのは、揚子江を中心に岳州の方には前の六師団が警備しております。揚子江から北の方には旧百六師団、昭和十三年編成の部隊ですが、ここで一応凱旋し、その後を広部隊に改編され警備しておったわけです。そこで一応漢口に到着しました。

漢口を中心に広部隊の一個師団が警備を受け持ち私たちの独歩九二大隊は応城を経て宋河鎮に大隊本部がありました。そこで私の四中隊は一個中隊だけ最前線の徳安という所で警備しておりました。

そこに一応追求しなければいけないということで、孝感から汽車に乗り、それから一線まで行かなければいけないということ、トラックに乗車しました。小銃もいくつか襲撃してきてもいいように実弾を込め、敵がきても絶対にトラックから降りるな、目的地に着くまで敵が撃つてきても下車するなという状況の中で徳安の中隊本部に到着したわけでありませう。正月の二十五日ごろです。

それから、いよいよ中隊に入り、未教育のものですので、教育班に入りまして、第一期の検閲まで四か月、四月いっぱいまでしごかれました。いよいよ陣地勤務です。

一個小隊、一個分隊が点々と要点に陣地を構築し、警備をしておったわけです。その間、私たちも出たり入ったりして、昭和十九年四月ごろ、いよいよ広部隊も大きな作戦に参加しなければならないとの情報が入ってまいりました。どちらの方へ行くのだろうということになりましたが、これも適確な情報が入らず、行動を開始しますと、中国打通作戦と申しまして、湘桂作戦、湘江から桂江につながる線に行かなければならないと行軍を続けておったわけですが、ゆくゆく長沙作戦に第一回勝負をしたわけであります。

長沙と申しますと第一次、第二次、第三次と日本軍が三回にわたる攻撃をしておる所で、非常に厳しい陣地構築をしておるわけです。第一次陣地はクリークから鹿砦、そして二線陣地、二陣地と構築してあったわけです。

六月十三日から攻撃しまして五月に入りまして、ちょうど中国の雨期に見舞われ、朝から晩までシトシトと降

る中を行軍しなくてはなりません、ハンドルはおっとりおっとりしても修理がきかない、薬を巻き付け、いろいろ工夫して長沙まで何とか、辿り着こうじゃないかということ、みな頑張ったわけです。輜重隊、特科隊の砲兵隊が雨期で非常に道のりが悪いものですから、臨時道路を一掃しないといかんと、非常に困難をきたしたことを覚えていきます。

六月十三日、いよいよ長沙攻撃を開始いたしました、第一線陣地を十四日の晩に奪取した。十五日はいよいよ敵が第一線陣地を脱出したということで、長沙の郊外北方に岳麓山という大きな山がございます。そこに要塞砲を一応据えたわけです。直径二〇センチくらいので、どんどん撃ってきて、しかも射程距離は確実ですし、第一線陣地をとつても第二線陣地に辿り着くのが非常に困難でした。そこで二日許り戦闘が停滞した。しかし、何とか九州男児の意地を見せようという気持と上官の励まし、部隊長じきじきの陣頭指揮で、ようやく第二線、第三線を突破、黎明に長沙の南門を占領し、やっと市内への突入口をひらいたのです。

その間、戦死者、負傷者がぞくぞく出まして、兵隊がどんどん減ってしまって、もう後には引けないと、十八日市内に突入しまして、十八、十九日の二日間市街戦を強行しまして長沙を完全に占領しました。二十日までが長沙攻略作戦と明記されています。

それからさしずめ兵員が非常に減り、何とか補充をしなければならぬと、長沙から三〇⁺離れた湘郷という街で一応待機し、補充の来るのを待ち、併せて体力の快復を待っていたわけです。

そのころ、大阪の三個師団で衡陽という街を包囲して、何回も突撃敢行を繰り返しても陥らない。軍の命令で広部隊も攻撃しろということで、私たちは湘郷から山奥を越えて近道をとって、衡陽に進出したわけです。

衡陽も堅固な陣地で、そう簡単に陥りなかつたのですが、私たちの隣部隊で編成の独歩一〇六大隊の一個中隊が全滅するほどの被害を蒙っております。この作戦で私の所の九二大隊は副官を一名失いました。

八月六日、衡陽を完全に攻略いたしたわけです。しかし、ここは四十日、三個師団で包囲しておいた関係で食

糧が全くないわけです。食糧確保が非常にむずかしく、また早いところは、稲の穂の早くでて、まだ完全に実のついてないところを刈り取って、あやして、釜でいって、実を固めて精米にして食べましたが、部隊も多く食料確保が困難でした。

道路は悪いし、どんどん前進してきますので輸送隊が追い着きません。ということで弾薬糧秣ともに苦勞した。一方、衡陽を攻略し、市内掃討戦を終り、八月八日に衡陽攻略を完了しました。市内はなにもございませんで先に進みまして、衡山という一つの小さな街でございまして。

羽毛山と申しまして、敵がやってこようとしたから、衡陽を奪回しようじゃないかと抵抗がありますので、これを防ごうと、羽毛山に小哨、分哨が出まして敵を阻止したわけでございますが、その間長沙も落ち、衡陽も陥ちたということで、今度は桂林から米軍機がどんどん飛んでくるわけです。どうしても昼の行動が絶対的に不利になってしまったわけです。動くとするれば夜間行動しかないということでした。

これから、いよいよ追及しなければならぬので、兵員を整えようというわけで、先の作戦の負傷者や、身体の弱い者を後送し、粒揃いの精鋭ばかりで再編成した。

羽毛山を後に真っしぐらに南へ進んだ。しかし、敵もさるもの、途中の山の上に陣地を構築し、日本軍の南下を阻止するので、なかなか思うように進まなかった。急行軍、急行軍で急ぎましたところ、九日ころと思いますが全県作戦に入っております。

南側に敵が陣地を構築していたので、それをひとつつ排撃せねば、どうしても友軍が南下できないので攻撃命令がでました。私たち大隊は宝塔嶺という山を一応攻撃することにになりました。宝塔嶺という山はひょっここのような形で、大きな木が生えておりませんので、遮蔽物というものが一つもありません。それを夜襲で取り、やっと南下する道がひらけたのであります。夜襲の敢行により大分死傷者が出ました。将校、下士官にも数人の犠牲者が出ております。

非常に苦しい戦いが、次から次へと出てきて、私たちは参りましたが、何が何でも、仏印に通ずる道路を早く

完成させなければならぬという軍の命令で、無理に無理を重ねて、その作戦を遂行したわけです。

この戦闘が終わりましたからまた、線路つたいに南下し、その晩の宿舎を設営していたところ、前の晩は敵が宿営して火をたいた跡があったわけです。時間的にそう経っていないとおもいます。これはそう時間的に経過していないことです。

行軍する場合は、大隊本部があり、尖兵中隊、尖兵小隊があり、そのような序列で編成を組んで進んでいくわけですが、夜明近くになりましたところ、尖兵から軽機の音がしますというものですから、とにかく私たちは尖兵中隊でしたから駈足で登ってみますと、ちょうど登り口にかけて、登りかけている敵がおります。それを撃ちまくりました。熟した柿の木をゆすぶるように敵が倒れた。苦しい中の戦闘にも成果のあがったのもあります。

どんどん追及し、いよいよ桂林の間近になり、これを陥さなくてはいかん、すべてが桂林の攻撃にかかっているわけです。すでに十一月に入っております夜は冷え

こんでまいります。被服は夏物ですので夜間になりますと非常に肌寒くなって過こしにくいという季節になり、夜間行軍の小休止のとき、稲藁をかぶって休んだり、一緒に重なり合って寝たという経験をしつつ桂林の攻略にさしかかったのであります。いよいよ桂林の攻略です。桂林は岩山の嶮であり、これに陣地を構築し見おろしに射撃するものですから、近寄るに近寄れないということがあったのです。

私たち十一月のことと思いますが、四中隊の一個小隊の将校斥候がでて、敵をちょっと摸索しようと命令があり、私たち一個小隊が桂林の近くまで行って敵状を探ったわけです。

すでに日本軍の攻撃するのがはっきり分かっておりますので鹿砦はあるし、鹿砦にはひも付きの手榴弾を下げて、地雷が隙間もなく埋めてあり、小隊長も見かねて、犠牲者が出るばかりなので一応このあたりで撤退しました所、それならもう一日待って、戦車が応援に来るから戦車が来たらいよいよ突撃にかかろうということで、戦車の来るのを一日まったわけであります。ところが戦車

がまいりまして、いよいよ戦車と連帯攻撃ということになりました。

歩兵の基礎訓練は受けていたわけですが、戦車との連携教育は全然受けておりませんから連携はうまくいかない。戦車は前方を確かめて進むわけです。たまた歩兵が五層ぐらいから叫んでも聞こえない。指先で教えながら合図する基礎的な教育があるわけですが、それを受けていない悲しさで、戦車兵は天蓋を開けないと前方が見えない。天蓋を開ける。天蓋を開けるとポンとやられる。見下ろし撃つ、そのことを繰り返しておりましたけれど、どうしてもこれから戦車を離しちゃいかんと思いましたが、戦車はどんどん進んで、やっと小高い岩山に近づき、戦車砲で銃眼めがけてポンポン撃ち込んでいきます。敵もいてもたまらず岩山を下りて市街の方へ行くということ、やっと桂林を攻略したわけであります。これが丁度、十一月二十三日でございます。

これも非常な犠牲者が出まして、もうほとんど一個中隊が六〇人内外の人数になりました。何とか補充を待たなければと桂林にしばらく駐屯しました。

後続部隊にバトンを渡して先の方に進むと、桂林から先の荔浦に私たち一個大隊は駐屯警備にあたったわけがあります。

しかし、中南支とはいえ、冬がきますとかなり冷え込んでまいります。被服はどうしても輸送がきかんということで、天幕あるいは藁を幾重にもかぶって夜を過ごすというあわれな生活を送ったわけです。しかし、弾薬だけは何としても確保しなければ駄目で、後続がないながら何とか確保しました。しかし、食糧はほとんど現地で徴発するかあるいは自分たちでもみを徴発して精米にするということ、作戦中は現地調達でした。

一応荔浦で次の兵員を確保しようとしていたところ、昭和十九年の現役兵が漢口の応城という所で教育を受けておるといふ連絡がありまして、その来るのを待っていたのです。

五月、六月になりました、彼らが到着しましたが、なお若干の新しい教育をしなくてはならない。それから、長沙・衡陽・全県・桂林で負傷しました兵隊はほとんど戻ってきませんでしたけれど、長沙・衡陽あたりで負傷

し、復帰の可能性の兵隊はほとんど原隊に追及している。そのあたりで、若干の兵員が集まった。そこで補充を待つとともに、警備滞在ということで七月までそこに駐屯して、七月中旬になりますと軍の反転せよとの命令で、私たちは、駐屯地を後に元きた道を反転しました。

ところが、今度は状況が余りかんばしくなく敵が強気に出てくるわけです。桂林の手前の長蛇嶺という大きな連峰がございます。そこに今度は陣地を構築して、日本軍が撤退するのを阻害しようということで、ここに立て籠っているのです。

そこで広部隊の九二大隊は長蛇嶺を占領して友軍の撤退を円滑にやってくれという命令があり、ちょうど七月二十日から攻撃にかかったわけであります。その上強気と弱気では当然差があるわけです。兵員は少ないし、敵は状況上も攻撃にでてきますので、なかなかここは陥ちず二三日かかってやっと奪取しました。

二十三日の晩、夜襲しました時、私の中隊長が戦闘中に即死ということでありました。この山の向う側の平坦地で戦闘した二中隊が二中隊長戦死ということで大きな

打撃を受け、まあ撤退ということで、撤退にかかったこともありますが、何分相当な負傷者や犠牲者が出ております。

この負傷者を早く担架で送り出さないことには、自分たちは撤退するわけにはいかない。その患者を後方に送るまで、ここで一応頑張っていたわけです。患者がいよいよ輸送完了した時点で、私たちも撤退し、また前線に向かったのであります。

全県までは敵が追ってくるものでありますから追撃されるたびに山に登り応戦し、また撤退しては、山に登って応戦ということで、全県まで辿りついたわけでありませう。全県の橋がちょうど焼け落とされて通れないということで、浅瀬を見付けて歩いて渡河したことを記憶しております。それから全県で、いよいよ撤退にかかりましたところ、突然敵が追撃してこなくなったのです。

八月二十五日ころ、大隊本部に集合、部隊長から終戦の詔書の朗読がありました。

これで私の長沙・桂林作戦の労苦談を終わります。一年四か月の長い戦闘期間で犠牲者の出た数は戦死、戦病

死合めて約一五〇〇人及び負傷者が約一五〇〇人程度を出して、復員集結地で復員業務に従事しました。

連隊本部行李中隊

宮城県 鈴木正禧

私は大正十年十一月七日生れで、昭和十七年五月十五日教育召集として東部三一部隊に応召、六月十三日引続き臨時召集により一時、東部二部隊歩兵砲中隊に編入、七月二五日歩兵第百四連隊に転属のため仙台出発。二七日宇品港出帆。八月二日呉淞港上陸、八月二日湖南省当陽に到着し、歩兵第百四連隊本部大行李班に編入されました。

大行李は民家を改造した所で向い合って二個班でした。私たち初年兵は一班五人、二班五人と向い合って暮すことになり、これが戦地での第一歩でした。翌朝、軍馬「仙垣」を渡され、手入れをしたのが作業の始まりです。十月には警備地清溪河附近にはもう雪が降り、馬の手入れ